

病害虫発生予察情報予報第3号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要

作物名	病害虫名	7月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除 のてびきの 記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫 (抜粋)	
		平年比	前年比			
普通作	早期 水稲 (上場 地域)	穂いもち	<u>多</u>	<u>多</u>	142~147	穂 い もち 
		紋枯病	<u>多</u>	<u>多</u>	149~151	
		斑点米かみシ	並	並	167~168 185~188	
	特記事項 1. いもち病 葉いもちの発生が多い。発生が多い圃場では、粒剤を施用する。 葉いもちの発生が認められた圃場では、穂ばらみ期に穂いもちの防除を行う。葉いもちの発生が上位葉に見られるなど穂いもちの多発が予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う。 2. 稲こうじ病 水和剤、粉剤を使用する場合には出穂20~10日前に中心に処理する。					
山間 早植え 水稲		葉いもち	<u>やや多</u>	並	142~147	セ ジ ロ ウ ン カ 
		セジロウンカ	<u>多</u>	<u>多</u>	160~162	
		トビロウンカ	並	<u>やや多</u>	157~159	
		コブノメイガ	並	並	164~165	
特記事項 1. いもち病 一部圃場で葉いもちの発生がみられている。蔓延を防止するために、発生初期に防除を行う。進展型病斑（円形ないし楕円形で、中央が灰白色、周縁が紫黒色となる病斑）がみられた場合は、早急に防除を行う。 2. セジロウンカ 本田での発生が多い。飛来成虫密度が1株当たり2頭以上、7月下旬の発生密度が株当たり10頭以上を目安に防除を行う。						
普通期 水稲		葉いもち	<u>多</u>	並	142~147	葉 い もち 
		セジロウンカ	<u>多</u>	<u>多</u>	160~162	
		トビロウンカ	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	157~159	
		コブノメイガ	並	並	164~165	
特記事項 1. いもち病 一部圃場で葉いもちの発生がみられている。新たな病斑の発生が認められた場合には、速やかに防除を行う。 また、補植用苗や畦畔に放置された残り苗にも、いもち病が一部でみられている。補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに除去する。 2. スクミリンゴガイ 中晩生品種で、大雨による浸冠水によりスクミリンゴガイが侵入した水田では、直ちに薬剤防除を行う。 3. 白葉枯病 常発地帯や前年発生した圃場で浸冠水した場合には、本田に粒剤を施用する。 4. セジロウンカ 本田での発生が多い。飛来成虫密度が1株当たり2頭以上、7月下旬の発生密度が株当たり10頭以上を目安に防除を行う。						

作物名	病虫害名	7月の予想発生量 ^{注1)}		病虫害防除 のてびきの 記載頁 ^{注2)}	予報対象の病虫害 (抜粋)	
		平年比	前年比			
野菜	イチゴ(育苗圃)	ハダニ類	並	<u>やや多</u>	204~205	 炭疽病による萎凋症状
		うどんこ病	並	<u>やや多</u>	194~196	
		苗立枯症 (炭疽・疫病)	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	198~202	
		アブラムシ類	並	並	210~211	
		特記事項 1. ハダニ類、うどんこ病 親株でハダニ類、うどんこ病の発生がみられる。古葉の葉かぎを行うとともに丸噴口等を用いて丁寧に薬剤散布を行い、子苗での発生を抑える。 2. 炭疽病、疫病、萎黄病 各病害とも一部圃場で発生が認められる。梅雨期は伝染が拡大しやすいため、発病した親株およびその子苗は直ちに圃場外で適切に処分し、子苗への伝染を抑える。また、炭疽病については10~14日間隔での薬剤防除を実施する。				
アスパラガス	褐斑病	<u>多</u>	<u>多</u>	314~315	 褐斑病	
	茎枯病	<u>やや多</u>	並	313		
	斑点病	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	314		
	アザミウマ類	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	317		
	ハダニ類	並	<u>やや多</u>	317~318		
	アブラムシ類	並	並	318		
	特記事項 1. 褐斑病 平年に比べ初発時期が早い。梅雨期に発生が拡大すると秋季に多発生し被害を生じるため、発生前~初期の防除を徹底する。 2. 茎枯病 降雨時はサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐ。また、発病茎は見つけ次第、除去し圃場外で適切に処分する。 3. 褐斑病、茎枯病、斑点病(共通) 晴天日には施設開口部を開放し通風を図る。各病害に対し発生前から3週間間隔を目安に薬剤防除を実施する(降雨日が続く場合や発生圃場では間隔を短縮する)。 4. アザミウマ類 5~7月は圃場内への飛び込みが多い。若茎及び親茎への寄生や食害による被害を防ぐため、虫見板(約20×30cm)への払い落とし調査(擬葉部を2~3回叩く)を実施し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。					

作物名	病害虫名	7月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除 のてびきの 記載頁	予報対象の病害虫 (抜粋)	
		平年比	前年比			
果 樹	果樹全般	果樹カメムシ類	少	少	かんキツ：245～248 ナシ：299、ブドウ：344	
		特記事項 1. 病害全般 <u>今後も降雨が続くと予想され、病害の発生しやすい条件である。雨の合間をぬって薬剤防除を行う。</u>				
	かんキツ	そうか病	並	<u>やや多</u>	216～218	かんキツ 黒点病 
		かいよう病	並	<u>やや多</u>	220～222	
		黒点病	<u>多</u>	<u>やや多</u>	218～220	
		ミカンハダニ	並	やや少	239～242	
		チャノキアザミウマ	並	並	236～238	
		特記事項 1. 黒点病 多くの圃場で発生が認められる。梅雨期においては雨の合間をぬって、薬剤防除を行う。				
	ナシ	黒星病	<u>やや多</u>	並	282～285	黒星病 ナシ 
		ナシマンクイ	並	並	296～299	
ハダニ類		並	<u>やや多</u>	301～303		
	特記事項 1. 黒星病 多くの圃場で発生が認められる。梅雨期間は主要な伝染期であるため、6月下旬～7月上旬に、DMI剤による防除を必ず実施する。発生圃や常発圃、雨が続く場合には、DMI剤を追加散布する。 2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、散布むらを生じないように実施する。					
ブドウ	黒とう病	<u>やや多</u>	並	327～329	べと病 ドウ 病 	
	べと病	<u>やや多</u>	<u>多</u>	330～332		
	褐斑病	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	332～333		
	チャノキアザミウマ	並	やや少	339～340		
	特記事項 1. べと病 降雨により発病が進展するので、降雨前の予防散布を徹底する。また、べと病の罹病葉は、二次伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。 2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 ナシの特記事項を参照。					

作物名	病虫害名	7月の予想発生量 ^{注1)}		病虫害防除 のてびきの 記載頁	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	炭疽病	多	多	393~394	 クワシロカイガラムシ (雄繭)
	輪斑病	多	多	394	
	カンザワハダニ	やや少	やや少	398~399	
	クワシロカイガラムシ	多	多	405~406	
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	多	403~404	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや多	404~405	
	チャノコクモンハマキ	並	並	401~403	
	チャノホリガ	やや少	並	400~401	
特記事項 1. クワシロカイガラムシ 防除適期は第二世代幼虫ふ化最盛期の7月中~下旬頃である。園内の発生状況を観察して、適期に防除を行う。 2. チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ 萌芽期~開葉初期に防除を行う。多発生園では、さらに一週間後を目安に追加防除を行う。 3. チャトゲコナジラミ 7月は成虫の発生時期であるため、園内の発生状況をよく観察する。発生園では、成虫が見られなくなった頃に防除を徹底する。					

注1) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注2) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

7月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する7月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成28年6月24日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3ヶ月予報における7月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (26.8℃)	40	やや高い
降水量	20	40 (338.5mm)	40	やや多い

Ⅲ. 7月の予報

早期水稲（上場地域）

巡回調査 6月23日



巡回調査圃場の様子（早期水稲）

1. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

葉いもち発生株率8.7%（平年1.5%、前年0.7%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 葉いもち感染好適条件出現状況【県内、隣接県 計11地点】

BLASTAM（6月20日～26日）において、感染好適条件が6月26日に3地点、25日に1地点、感染準好適条件が20日に1地点で出現した（表1）。〈±〉

(3) 7月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) BLASTAMによる感染好適条件の出現状況を参考に、圃場での発生に注意する（佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照）。

(2) その他については、特記事項を参照する。

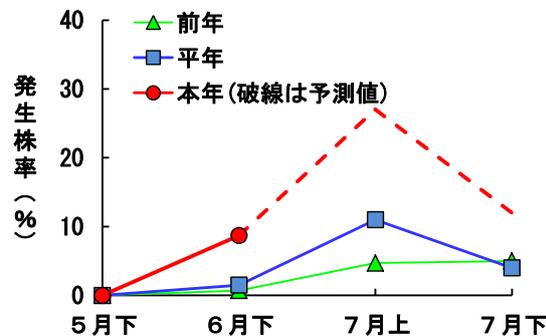


図1 早期水稲での葉いもちの発生推移

表1 BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の出現状況

月日	佐賀県						福岡県			長崎県	
	唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	川副	前原	太宰府	久留米	松浦	佐世保
6月20日	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25日	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26日	—	10	—	10	—	—	—	10	—	—	—
27日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28日	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—

注) 1：準好適条件（前5日間の平均気温は20℃未満だが、湿潤が10時間以上）
 2：準好適条件（前5日間の平均気温は25℃を越えているが、湿潤が10時間以上）
 3：準好適条件（湿潤期間中の平均気温は15～25℃でないが、湿潤が10時間以上）
 4：準好適条件（湿潤期間中の気温は比較的低い、湿潤が10時間以上）
 10：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した）
 —：好適あるいは準好適条件の出現なし
 ?：判定不能

プラスタム（BLASTAM）情報の使用上の注意

- BLASTAMは、気象条件（アメダスデータ）のみによって葉いもちの発生を予測するシステムであり、BLASTAMでの感染（準感染）好適条件の出現回数が多い場合、葉いもちの発生面積が急増し、発病程度も激しくなることが予想される。しかしながら、葉いもちの発生には、気象条件の外にも、菌の多少（密度）、イネ品種による抵抗性や体質、薬剤防除条件なども関与するため、葉いもち発生予察の参考資料の一つとして扱う。
- BLASTAMは、葉いもちを対象としており、稲の移植約20日後からの35日間（6月15日移植の場合、7月5日～8月10日）が適用期間とされている。ただし箱施肥が行われた圃場で、薬剤の効果が持続する期間にはBLASTAMは適用できないので注意する。
- 葉いもちは、菌が進入してから発病するまで約1週間かかるため、BLASTAMで感染（準感染）好適条件が現れた場合、その約1週間後から初発あるいは病斑数が急激に増加することが予想される。

2. 紋枯病

1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 早期水稲の出穂期～登熟期は気温が高い時期であり、本病が進展しやすいので、液剤、粉剤の場合は出穂の20～10日前を中心に防除する。

(2) 薬剤は株元に十分かかるように散布する。

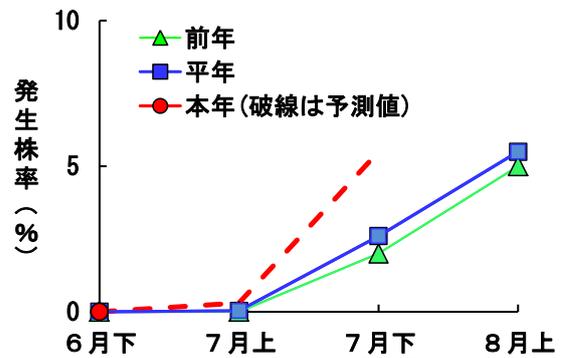


図1 早期水稲での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、

アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 水田隣接のイネ科植物でのすくい取り調査（6月21～27日）

平年よりやや少ない発生（表2）。〈-～±〉

(2) 7月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 水田周辺の雑草地（畦畔、休耕地、空き地等）は斑点米カメムシ類の増殖・飛来源となるので、除草を徹底する。なお、水稲の出穂直前に除草すると水田内に斑点米カメムシ類を呼び込むことになるので、水稲の出穂10日前までに除草する。

(2) 斑点米カメムシ類は、山麓地帯や畦畔及び休耕地にイネ科雑草が多い地域で発生密度が高い傾向にある。各地域ですくい取り調査や見取り調査を行い、防除要否（穂揃い期～乳熟期に、ほ場内で20回すくい取りで5頭以上いる場合は防除を実施）を判断する。

(3) 多発生時は穂揃い期とその7～10日後に防除を行う。少発生の場合は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に防除を行う。

表2 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数（2016年6月23～27日）

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
玄海町	空き地	イタリアンライグラス	1	0	1	0	1	0	20	7	0
小城市小城町	畦畔	エノコログサ類、ホシバ	0	0	1	0	0	0	35	8	0
〃 芦刈町	畦畔	ホシバ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
武雄市	空き地	イタリアンライグラス	0	0	1	0	0	0	2	0	0
唐津市	畦畔	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	63	5	0
白石町①	道端	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
〃 ②	空き地	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
〃 ③	空き地	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
嬉野市塩田町	畦畔	エノコログサ類	2	0	0	0	9	0	0	0	0
佐賀市東与賀町	畦畔	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均（本年）			0.3	0.0	0.3	0.0	1.0	0.0	12.0	2.0	0.0
前年			1.8	0.0	0.8	0.1	0.5	0.0	25.2	30.5	0.0
平年（過去10年の平均）			3.7	0.1	1.4	0.2	0.6	0.1	28.4	14.8	0.1

水稲（山間早植え）

巡回調査 6月21日



巡回調査圃場の様子（早植え水稲）

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

②巡回調査圃場以外

一部圃場で葉いもちの発生が認められた。

〈±～+〉

(2) 感染好適条件発生状況【県内、隣接県 計11地点】

BLASTAM（6月20日～26日）において、感染好適条件が6月26日に3地点、25日に1地点、感染準好適条件が6月20日に1地点で出現した（表1）。〈±〉

(3) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) BLASTAMによる感染好適条件の出現状況を参考に、圃場での発生に注意する（佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照）。

(2) その他については、特記事項を参照する。

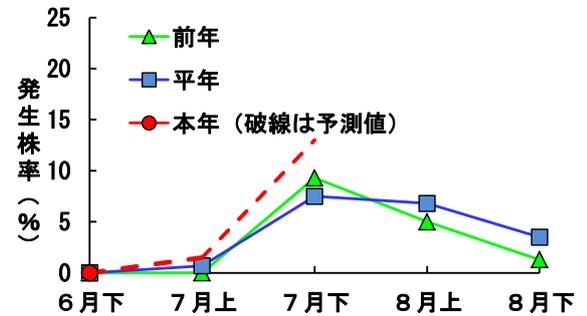


図1 山間早植え水稲での葉いもちの発生推移

2. セジロウソカ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査

発生株率9.8%（平年1.5%、前年3.8%） 平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) これまでの飛来量

平年並である（表3）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する（[佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照）。

(2) その他については、特記事項を参照する。

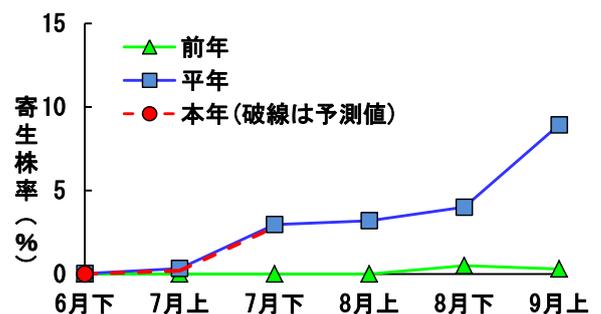


図1 山間早植え水稲でのトビロウソカの発生推移

3. トビロウソカ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生株率0% (平年0.0%、前年0%)
平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2)これまでの飛来状況

6月20日、22日に、予察灯(嬉野市)において誘殺を確認し、飛来量は平年よりやや少ない(表3)。<ー~±>

3)防除上注意すべき事項

(1)今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する([佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照)。

4. コブノメイガ

1)予報の内容

発生量：平年並(前年並)

2)予報の根拠

(1)発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生株率0% (平年0.0%、前年0%)
平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2)これまでの飛来状況

平年並である(表3)。<±>

3)防除上注意すべき事項

(1)今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する([佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照)。

(2)止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、飛来あるいは発蛾最盛期の1週間後に防除を行う。

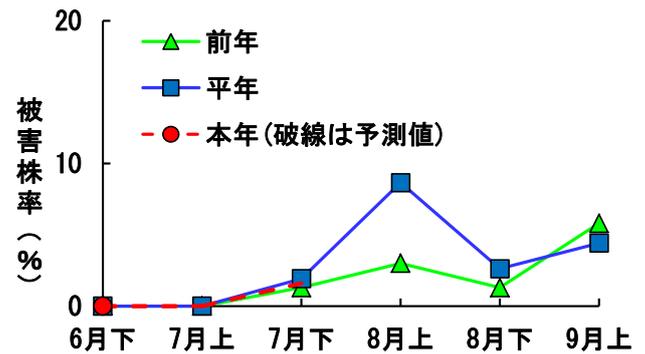


図1 山間早植え水稲でのコブノメイガの発生推移

表3 ウンカ類及びコブノメイガの飛来状況(平成28年)

月	日	トビイロウンカ			セジロウンカ			コブノメイガ							
		佐賀県			佐賀県			佐賀県						長崎県	
		佐賀市	佐賀市	嬉野市	佐賀市	佐賀市	嬉野市	佐賀市	佐賀市	神崎市	伊万里市	白石町	嬉野市	諫早市	諫早市
	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB	粘着トラップ (20W蛍光 灯)	粘着トラップ (20W蛍光 灯)	粘着トラップ (20W蛍光 灯)	粘着トラップ (20W蛍光 灯)	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB	
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	2日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	3日	0	0	0	0	0	0	0	—	0	0	0	0	0	—
	4日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	5日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	6日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	7日	0	0	0	0	0	0	0	—	0	0	0	0	0	—
	8日	0	0	0	0	0	1	0	—					0	—
	9日	0	0	0	0	0	0	0	—					1	—
	10日	0	0	0	0	0	0	0	—	0	0	0	0	0	—
	11日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	12日	0	0	0	0	0	0	0	—					0	—
	13日	0	0	0	0	0	1	0	—					0	0
	14日	0	0	0	0	0	2	0	—	0	0	0	0	0	0
	15日	0	0	0	4	0	2	0	—					0	0
	16日	0	0	0	5	0	4	0	—					2	0
	17日	0	0	0	0	0	1	0	—					0	0
	18日	0	0	0	2	0	74	0	—	0	0	0	0	0	0
	19日	0	0	0	3	0	5	0	—					0	0
	20日	0	0	4	13	0	71	0	—					0	0
	21日	0	0	0	0	0	20	0	—	0	0	0	0	1	0
	22日	0	0	2	3	1	69	0	—					7	0.5
	23日	0	0	0	10	0	9	0	—					10	0.5
	24日	0	0	0	14	0	24	0	—	0	0	0	0		
	25日	0	0	0	2	0	6	0	—						
	26日	0	0	0	4	0	15	0	—						
6月1日～26日 の総誘数(本年)		0	0	6	58	1	304	0	0	0	0	0	0	21	1
6月1日～25日 の総誘数(平 年)		0.6	1.7	215.9	115.3	60.3	1051.1	—	—	—	—	—	—	—	—

注1)ウンカ類:川副町ネットトラップと予察灯(ライトトラップ)は農業試験研究センター調査。嬉野予察灯は農業技術防除センター調査。
 平年値は川副町ネットトラップと予察灯は過去36年、嬉野町予察灯は過去29年の平均値。嬉野町予察灯は、飛来数が極端に多かった平成3年を除外した数値。
 注2)コブノメイガ:佐賀市は農業試験研究センターで調査。千代田町、白石町、伊万里市、嬉野市は防除員が調査。
 長崎県のデータは、長崎県病害虫防除所提供。

水稻 (普通期水稻)

巡回調査 6月21日～27日



巡回調査圃場の様子 (普通期水稻)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率0.8% (平年0.2%、前年0.8%)

平年比: 多<+> 前年比: 並<±>

② 一部圃場で補植用苗にいもち病の発生を認めた(発生圃場率: 本年21.2%、前年9.7%、26年2.6%)。 <±~+>

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 <±~+>

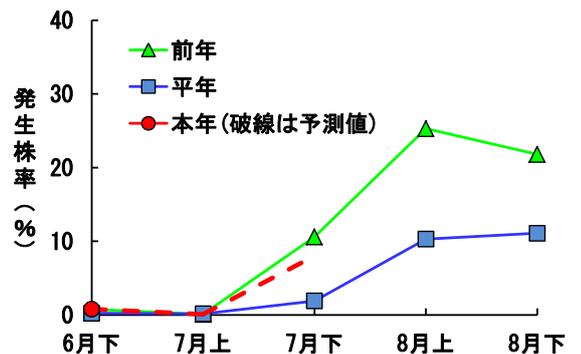


図1 普通期水稻での葉いもちの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後のBLASTAMによる感染好適条件の出現状況を参考に、圃場での発生に注意する（[佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照）。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

2. セジロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査

発生株率10.6%（平年0.4%、前年0.3%） 平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) これまでの飛来量

山間早植え水稻に準ずる（表3参照）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する（[佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照）。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

3. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査

発生株率0.1%（平年0.0%、前年0%） 平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) これまでの飛来状況

山間早植え水稻に準ずる（表3参照）。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する（[佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照）。

4. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査

発生株率0%（平年0.0%、前年0%） 平年比：並〈±〉、前年比：並〈±〉

(2) これまでの飛来状況

山間早植え水稻に準ずる（表3参照）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する（[佐賀県農業技術防除センターのホームページ](#)を参照）。

(2) もち品種等では止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、飛来あるいは発蛾最盛期の1週間後に防除を行う。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：6月21日～23日、親株を調査）



巡回調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：7.3%（平年7.9%、前年24.7%）

平年比：並（±）

前年比：少（-）

(2) 7月の気象予報

気温はやや高いものの、降水量がやや多いため、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(2) その他については特記事項を参照。

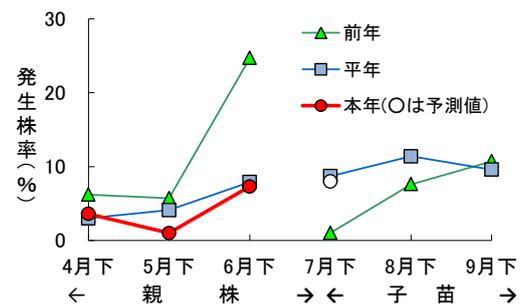


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：30.0%（平年45.7%、前年29.3%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(2) その他については特記事項を参照。

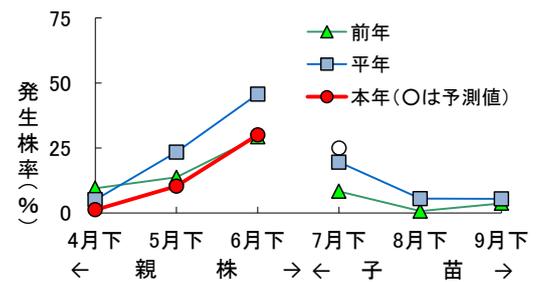


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

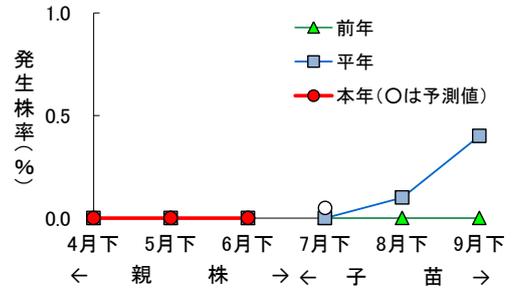


図1 イチゴ苗立枯症の発生推移

アスパラガス

巡回調査（8圃場）

調査日：6月21日～23日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：3.1%（平年0.1%、前年0.6%）

平年比：多（+）

前年比：多（+）

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



巡回調査圃場の様子

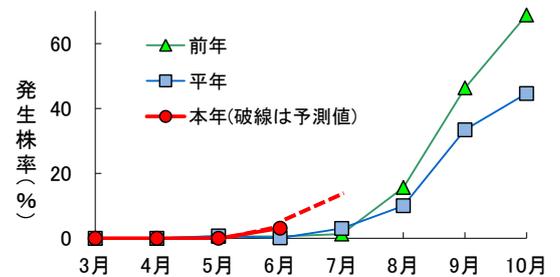


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0.3%（平年0.2%、前年0.3%）

平年比：並（±）

前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

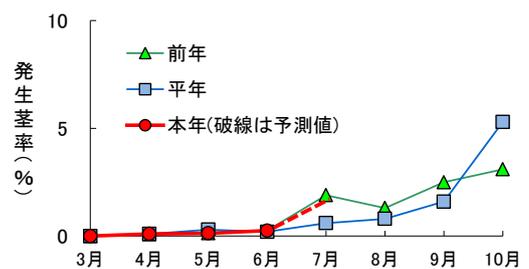


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：6.3%（平年5.7%、前年5.0%）

平年比：並（±）

前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

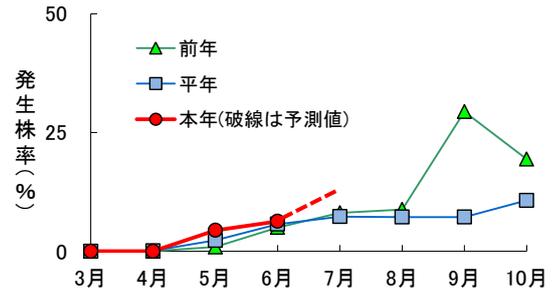


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：34.4%（平年27.5%、前年16.9%）

平年比：並（±）

前年比：やや多（±～+）

(2) 7月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

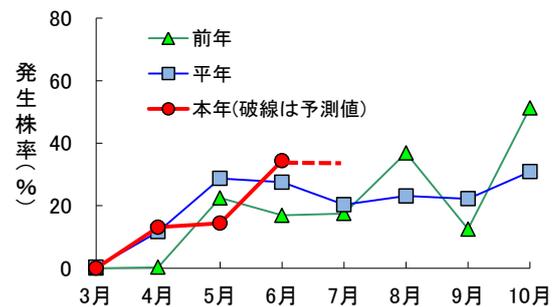


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

カンキツ

巡回調査（8圃場）

6月21、23日

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.3%、前年0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）



巡回調査圃場の様子

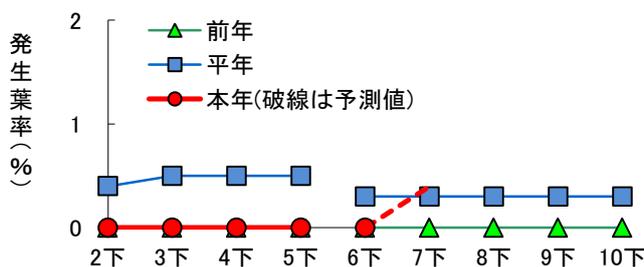


図1 カンキツかいよう病（葉）の発生推移
（注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査）

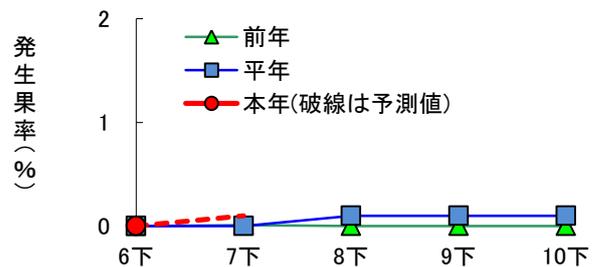


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

- (2) 7月の気象予報
降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年発生園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤（クレフノン200倍加用）による定期的（20〜25日間隔）な防除を行う。
- (2) 銅水和剤（クレフノン200倍加用）にジマンダイセン水和剤を加用すると銅水和剤の防除効果が低下するので控える。
- (3) 発病した枝や葉は伝染源となるので除去する。ただし、強剪定は枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。
- (4) 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、7日前〜前日までに必ず防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生果率：5.6%（平年0%、前年0%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

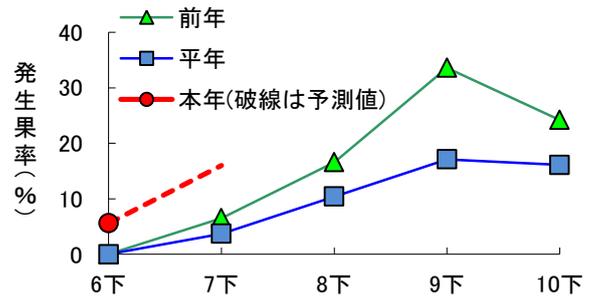


図1 カンキツ黒点病の発生推移

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200mm〜250mm（6月にマシン油乳剤加用の場合は300〜400mm）に達した時点を目安とする。ただし、積算降雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (2) 枯れ枝は伝染源となるので除去し、処分する。また、防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。
- (3) その他は、特記事項を参照する。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉率：8.6%（平年10.5%、前年23.8%）

平年比：並〈±〉 前年比：少〈-〉

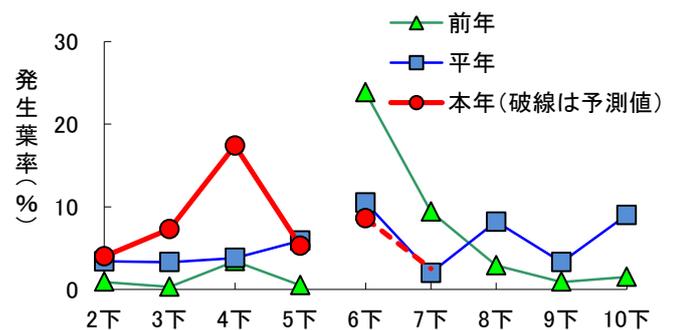


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

（注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査）

(2) 7月の気象予報

気温がやや高いものの、降水量がやや多く、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (2) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5〜1頭）に防除を行う。
- (3) 7月以降にマシン油乳剤を散布すると、糖度の低下及び腐敗果の増加を招くので使用しない。

4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生果率：0.3%（平年0%、前年0%）

平年比：多<+> 前年比：多<+>

② 黄色粘着トラップ（図2参照）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

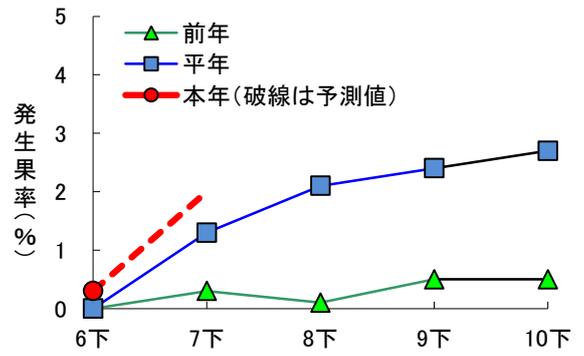


図1 チャノキイロアザミウマのコンキツでの発生推移

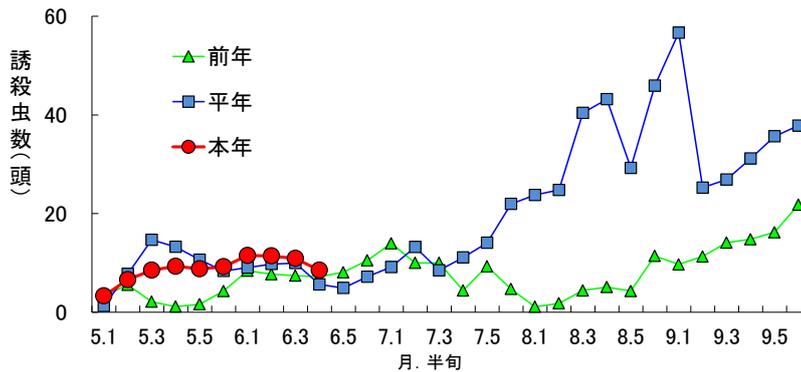


図2 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

(2) 7月の気象予報

気温がやや高いものの、降水量がやや多く、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) チャノキイロアザミウマの発生が多い地域では、7月中下旬に薬剤防除を徹底する。

(2) イヌマキ、サンゴジュ等は発生源となるので、これらの防風樹に隣接する樹では特に発生に注意する。

ナシ

巡回調査（5圃場）
6月20日

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1、2参照）

発生葉率：3.2%（平年2.5%、前年3.0%）

平年比：やや多<+> 前年比：並<±>

発生果率：1.2%（平年1.4%、前年0.5%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>



巡回調査圃場の様子

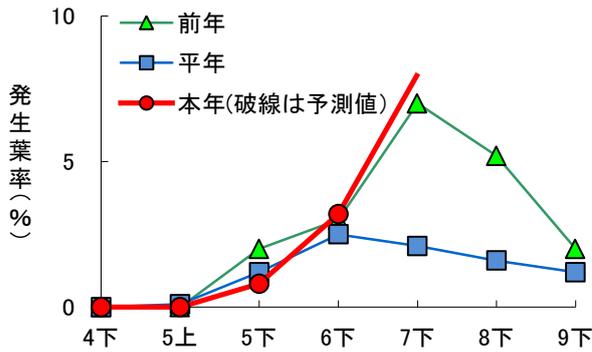


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

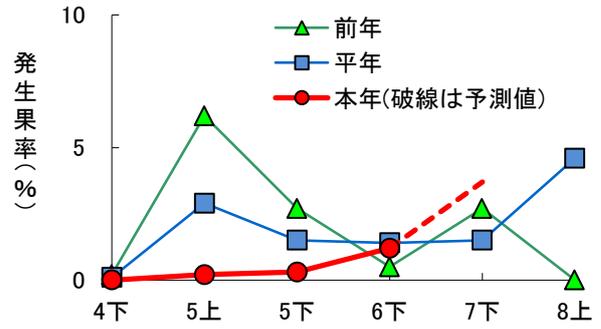


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病葉や発病果実は除去し、園外で処分する。

(2) その他は、特記事項を参照する。

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① フェロモントラップ（図1参照）

平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈-～±〉

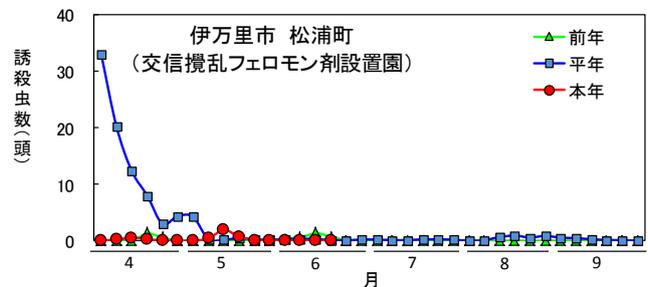
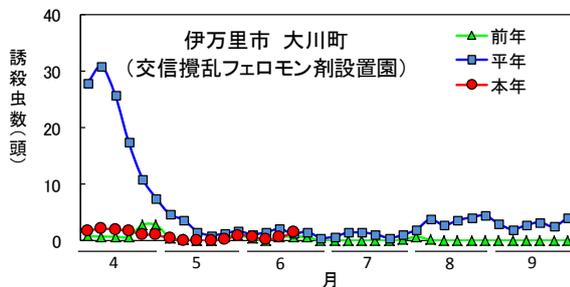
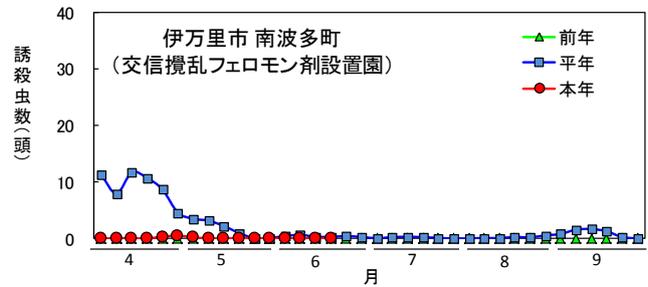
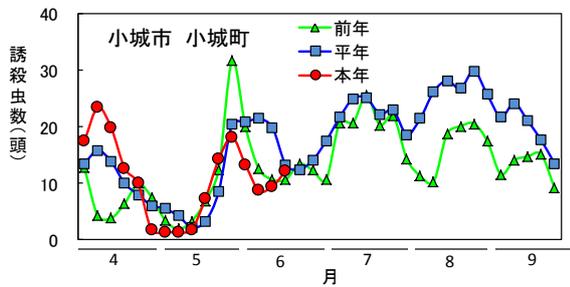


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
（果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査）

② サクラに設置したフェロモントラップ（表1）

サクラに設置しているフェロモントラップ（伊万里市3か所）での、6月第1～4半旬までの誘殺数は前年よりやや少なかった〈-～±〉。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数(頭)
(西松浦農業改良普及センター調査) ※6月1~4半旬の合計値

地点数	H26年度	H27年度	今年度
南波多町	37	7	8
大川町	23	34	17
新天町	79	74	50
平均値	47	38	25

(2) 7月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 7月以降は、世代が混在するため、7~10日毎に薬剤散布を行う。
- (2) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10~14日間隔で薬剤散布を行う。

ブドウ

巡回調査(6圃場)
6月20~23日



巡回調査圃場の様子

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生葉率：0%(平年0%、前年0%)

平年比：並〈±〉

前年比：並〈±〉

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。
- (2) 枝葉の徒長や晩期伸長にならないように肥培管理に注意する。

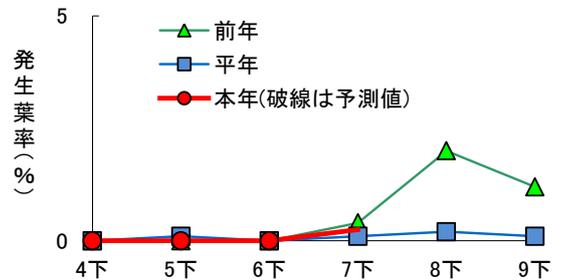


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. べと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生葉率：0.2%(平年0.1%、前年0.2%)

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±~+〉

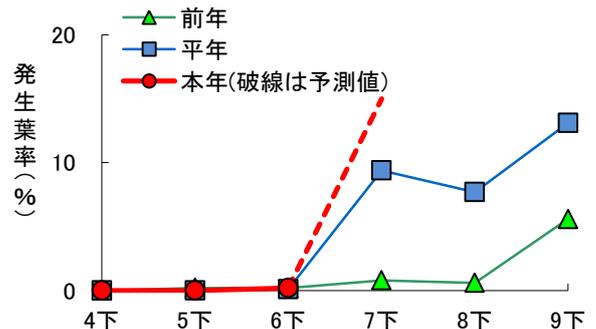


図1 ブドウべと病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 防除効果を高めるために、棚面の上からも散布する。
- (2) ブドウべと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。
- (3) その他は、特記事項を参照する。

3. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

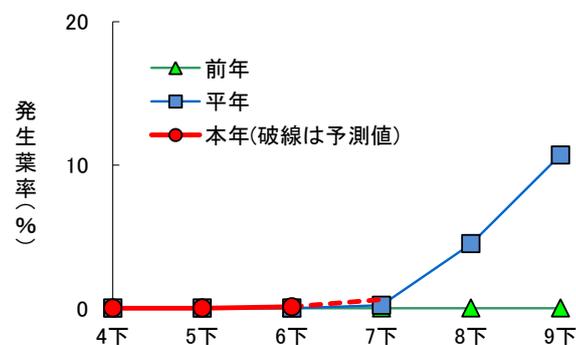


図1 ブドウ褐斑病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬剤散布は葉裏にもかかるよう丁寧に行う。

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯（図1参照）

平年比：少（-） 前年比：少（-）

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生量は地域によって異なるため、園内をこまめに見回って、飛来状況の把握に努め、寄生が認められた場合には、直ちに防除を実施する。
- (2) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くならないように剪定をする。
- (3) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。

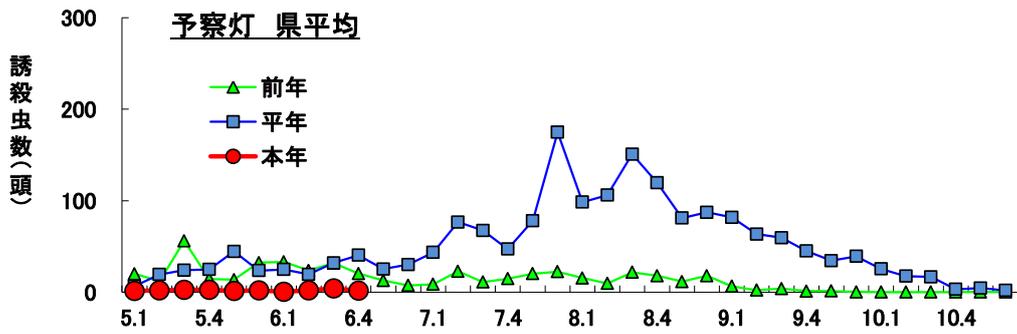


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

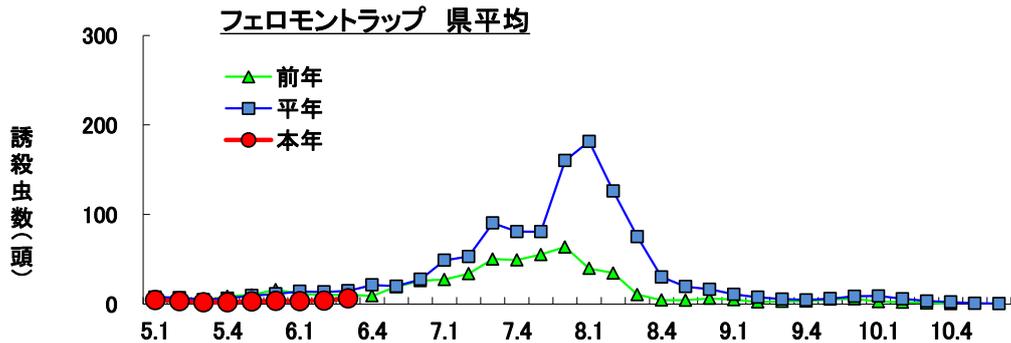


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉、唐津市鎮西、基山町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

茶

巡回調査（7圃場）
6月21～23日



巡回調査圃場の様子

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉数：4.1枚（平年0.6枚、前年4.6枚）

（発生圃場率：85.7%）

平年比：多〈+〉

前年比：並〈±〉

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は雨滴により新芽に伝染するため、開葉初期の予防散布を徹底する。

(2) 三番茶を摘採しない園は、二番茶後に浅刈り等を行い、発病葉を除去する。

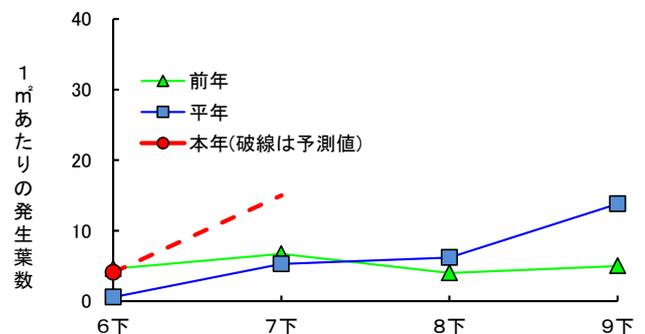


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉数：0.6枚（平年0.1枚、前年0.1枚）

（発生圃場率：28.6%）

平年比：多〈+〉

前年比：多〈+〉

(2) 7月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 整枝時の傷口から感染するため、摘採・整枝後直ちに防除を行う。

(2) 二番茶摘採後に多発した場合は、剪枝により病斑部を除去する。

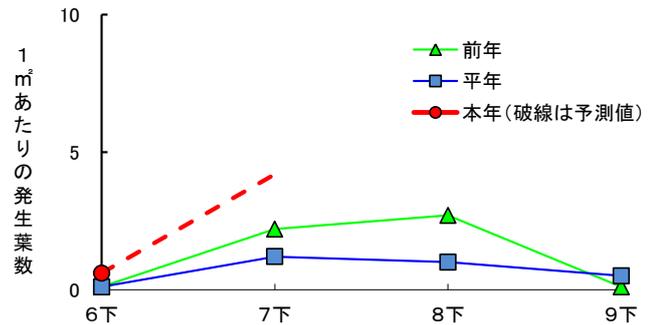


図1 輪斑病の発生葉数の推移

3. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：38.6%（平年30.1%、前年22.9%）

（発生圃場率：85.7%）

平年比：やや多〈±〜+〉

前年比：やや多〈±〜+〉

② 巡回調査圃場以外

一部で多発生した圃場が認められる〈+〉

(2) 7月の気象予報

気温がやや高いものの、降水量がやや多いため、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

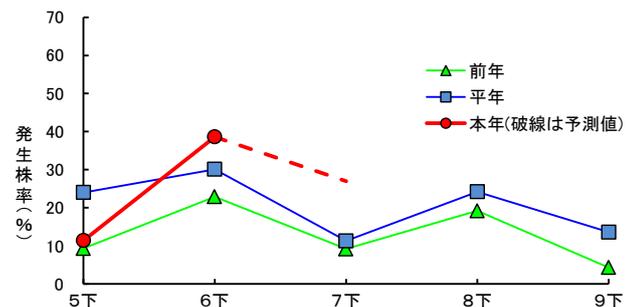


図1 クワシロカイガラムシの茶での発生推移

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：6.6頭（平年3.5頭、前年1.3頭）（発生圃場率：85.7%）

平年比：やや多〈±〜+〉

前年比：多〈+〉

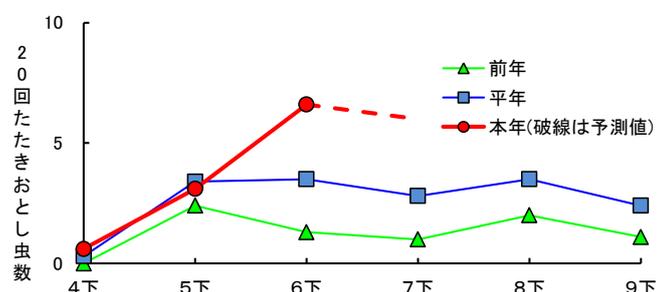


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

(2) 7月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：5.9頭（平年29.4頭、前年7.4頭）（発生圃場率：85.7%）

平年比：やや少〈-～±〉

前年比：並〈±〉

(2) 7月の気象予報

気温が高いものの、降水量がやや多いため、並発生の条件〈±〉

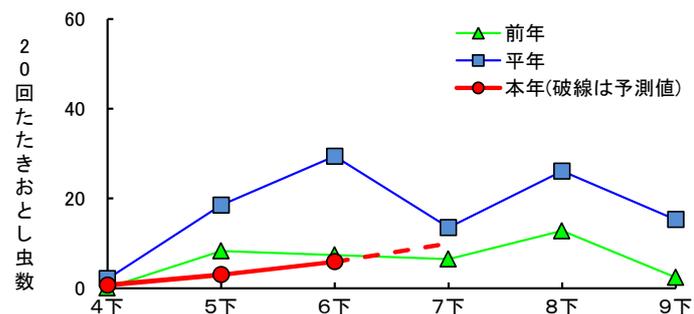


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に5月25日～6月24日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）

作物名	病害虫名	九州・沖縄・山口		その他の都道府県	
		注意報	警報	注意報	警報
水稲	縞葉枯病			6/1 栃木県 6/9 茨城県	
水稲	斑点米かみじ類			6/16 石川県 6/21 富山県	
水稲	いもち病	6/23 大分県			
コムギ	黄さび病			5/27 長野県	
イチゴ	うどんこ病			5/31 香川県	
ネギ	べと病			5/31 香川県	
果樹	果樹かみじ類			5/31 愛知県	
カンキツ	かいよう病	5/31 沖縄県			
カンキツ	黒点病	6/24 宮崎県			
ナシ	黒星病			5/27 福島県 6/3 宮城県	
モモ	せん孔細菌病			5/31 愛知県 6/8 岡山県	
ブドウ	べと病			6/22 香川県	
キク（露地）	白さび病			5/31 愛知県	
サウナ	イネヨトウ	6/10 鹿児島県			

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

	作物名	病害虫名	発表日及び発信元
野菜	トマト	黄化病（ToCV）	5/31 愛知県
	ニンジン	キクノネハネオレバエ	6/7 静岡県
	ホウレンソウ	ハコベハナバエ	6/10 千葉県
	レタス	オオクビキレガイ	6/6 広島県
果樹	キウイフルーツ	かいよう病（Psa3系統）	5/31 長崎県 5/31 長野県
	ブルーベリー	ブルーベリータマバエ（仮称）	6/22 静岡県
花き	インパチェンス	べと病	6/6 広島県

6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。

農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

